

Title	作者の意圖から國史と孔子の解説へ： 嚴粲詩經解釋における小序尊重の意義
Sub Title	From the authors' intentions to the explications of national archivists and Confucius : the significance of the minor preface ('xiaoxu') in Yan Can's interpretation of the "Shijing" authors'
Author	種村, 和史(Tanemura, Kazufumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.6 (2013.) ,p.1- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20130331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

作者の意圖から國史と孔子の解説へ

——嚴粲詩經解釋における小序尊重の意義——

種村和史

I はじめに

南宋の嚴粲（生卒年不詳^①）の『詩緝』^②（淳祐八年、一二四八、刊刻開始、淳祐十一年、一二五一、以後成書——周東亮氏の考證に據る^③）は、朱熹（一一三〇—一二〇〇）の『詩集傳』、呂祖謙（一一三七—一一八二）『呂氏家塾讀詩記』と並んで、南宋詩經學を代表する著述としてつとに評價が高く、その學問的性格と詩經學史上における意義について、近年、黃忠愼氏による專著のほか、複数の學者による研究成果が發表されている。特に黃氏の著作は、嚴粲詩經學の全體像とその意義とについて、經學・理學・文學の三つの視點から詳細に考察した成果がまとめられており、今後の嚴粲研究の原點とすべき業績である。

嚴粲の詩經解釋の特徴として常に挙げられるもののうち、次の二つが特に重要である。一つは、嚴粲が、『詩

經』の文學性を重視した解釋を行ったこと、特に詩篇の作者の創作意圖、表現意圖の解明を重んじたことである。^⑦もう一つは、嚴粲が小序を解釋の規範として尊重したことである。^⑧詩序は、漢唐詩經學においては、孔子の弟子子夏の手になるものとして解釋の絶對的なよりどころとされたが、宋代になると、その説の正しさに對して多くの學者から疑問が呈せられ、小序を遵奉すべきか否かについて、兩宋を通じて活發な議論が繰り廣げられた。とりわけ、南宋の朱熹が『詩集傳』（以下、「集傳」と略稱）を著すにあたって小序を排し、自分自身の目で詩篇を熟讀玩味し、獨目の解釋を行ったことは、宋代詩經學の學問的達成を具現するものとして高い評價が與えられてきた。これに對して、嚴粲は朱熹の詩經學に大きな影響を受けたが、こと小序に對する態度については、朱熹とは反對に尊序の立場をとった。

從來の研究では、右の二つの特徴は、それぞれ獨立して取り上げられる傾向が強く、相互の關係については十分な考察がなされていない。^⑩あるいは、嚴粲は詩經解釋にあたつて文學性を重視した解釋を目指したが、小序尊崇の態度が障壁となつて充分に展開されることができずに終わつたと説明されることもある。^⑪

しかし、兩者の關係をそのように捉えるだけでは、朱熹以後にあつて、しかも朱熹から大きな學的影響を受けて、彼と比肩するような本格的な詩經研究を行った嚴粲が、朱熹と異なり尊序の立場をとつたことの意味を十分に説明することはできないのではないだろうか。もちろん、小序を墨守すべき至高の存在と考えるか否かは、歷代の學者それぞれにとつて、傳統的權威に對する自らのスタンスを示す大問題であり、いわば儒者としての自己規定に關わる事柄である。しかし、それは同時に詩篇の解釋のしかたに直接影響する問題でもある。そうである以上、それぞれの學者が選擇した尊序あるいは反序の立場が、その詩經解釋の方法論の中にどのように組み込まれ、どのように機能しているか、という視點から考察する必要もある。すなわち、詩經解釋における機能的側面から、尊序・反序

の意義を考えるとということである。これは反序に屬する學者に對してはまでも、尊序の立場をとる學者の著述に對しては、充分になされているとは言えない。本稿は、そのような視點から嚴粲にとつての尊序の意味を考察してみたい。

本論に入る前に、嚴粲の小序認識について基本的な事項を確認しておこう。嚴粲は小序を尊重したとは言つても、小序のすべてを尊重したわけではなく、第一句（以下、「首序」と稱する）のみを由來正しいものとして尊重し、第二句以下（以下、「後序」と稱する）に對しては是非非の態度をとつた。彼は、小序首序の成り立ちについて次のように言う。

詩題の下第一句は、國史が著したもので、「首序」と稱する。それ以下は詩經を解釋した學者の言葉で、「後序」と稱する（題下一句、國史所題、爲首序。其下說詩者之辭、爲後序）
（『詩緝條例』）

嚴粲は、「首序」は詩篇を管理した諸國の國史官の手になるものと考えた。作詩と同時期に、後世が知り得ない事情に通じた者によつて書かれたもので據るべきものだと考えたのである。¹²これに對して、後序は後世の學者による解説の文章であり、依據するに足るものと誤つたものとが混在していると考えた。¹³實際、『詩緝』には後序の誤りを指摘したところが多い。このように小序を分割する認識は、北宋の蘇轍・程頤以來の説を繼承したものである。¹⁴

ただし嚴粲は、今見る首序は國史が題したもののそのままではなく、『詩經』を編纂した孔子の手が加わっていると考えた。鄭風「有女同車」首序『有女同車』は、忽を刺るなり（有女同車、刺忽也）について、嚴粲は次のよ

うに言う。

いずれも最終的に國を追われたり、いったん追われた國主に返り咲いたりしたために、首序は彼らを「鄭伯」とは稱さず、本詩序では「忽」と、「擊鼓」序では「州吁」と、「墓門」では「陳佗」と稱したのである。これらはいずれも春秋の筆法を用いたものである。このことから首序には孔子の手が加えられていることがわかる（以其終失國、出入、皆不稱鄭伯、此首序稱忽、擊鼓稱州吁、墓門稱陳佗、皆用春秋書法、知經聖人之手矣）

嚴粲は、首序は詩篇が詠う對象に對する毀譽褒貶の意を表すために字句を選び抜いて書かれていて、『春秋』の一字褒貶と同様の書法によっていると捉え、このことを根據にして、首序には『春秋』を編纂した孔子の手が加わっていると考えた。つまり、首序は、まずは國史が作詩の状況を説明するために書いたものであるが、孔子は彼の道德的評價を示すために、字句を書き換え潤色を加えたと考えたのである。首序には作者と同時代の人間でなければ知り得ない情報が表示されていると同時に、詩篇に歌われた事柄や人物に對する孔子の評價も示されているからこそ、二重の意味で尊ぶべき存在なのである。

個々の詩篇の解釋に即して、作者と小序との關係についての嚴粲の認識を見ると、おおむね二種類に分類できる。一つは、詩人の作詩の意圖と小序の説とが合致していると捉えるものである。嚴粲の詩經解釋の中ではこれが多數を占めている。この場合、小序が提示する道德的意義は、詩篇にすでに具體的に表現されていて、小序はそれを要約したということになる。従來の研究では、このケースに視點が集中している。しかし、嚴粲の詩序觀、詩篇解釋

の性格を考えるためには、それだけでは不充分である。

嚴粲の詩經解釋においては、もう一つ、詩人の意と小序の説との間に齟齬があると捉える場合が、少數ではあるが存在する。つまり、小序は詩篇に表現されていない事柄を述べていると考えるケースである。嚴粲はなぜこのような齟齬が生じたと考えているか、齟齬があるにもかかわらず序を尊ぶのか、齟齬は何を意味していると考ええているかを分析することによって、彼の詩序觀、特に詩篇解釋との關係をより深く知る手がかりを得ることができ。故に、本稿ではこのケースに焦點を當てて考察を進めていきたい。

黃忠愼氏は次のように言う。

後の學者が『詩經』の詩篇を解釋するときに追求した言外の意というのは、往々にして作詩者の言外の意のみではなく、『詩經』を編集し、詩序を書いた聖人、國史の意であつた。嚴粲もそうであり……『詩緝』の中で言われる「言外の意」のほとんどの部分は、實はすべて聖人や國史の言外の意である（後來的學者在詮釋三百篇的詩文時、他們所追求的言外之意往往不只是作詩者的言外之意、而是編《詩》者、序《詩》者的聖人、國史之意。嚴粲就是如此……在《詩緝》裡說的「言外之意」有絕大部分其實都是聖人、國史的言外之意¹⁶）

さらに氏は、嚴粲が言う「言外の意」には、詩の内容と詩序との不整合を調整する働きがあつたことを指摘している。¹⁶ 本稿の考察は、黃氏の指摘を出發點として、嚴粲の詩經解釋の内實と思考のメカニズムを明らかにせんとするものである。

なお、本稿で引用した經說のうち、特に書名を記さないものはすべて嚴粲『詩緝』からの引用である。また、前

述したように、嚴粲は小序のうちの首序を聖人の意を體現しているとして遵奉し、後序については後の詩經學者による敷衍として絶對視はしなかった。しかし、個々の經説を見ると事實上後序に基づいている例も多く、彼の解釋を考えるに當たつては、後序を完全に無視することはできない⁽¹⁷⁾。このことから、本稿で小序を引用する際には必要に応じて、後序を含めた全文を引いた。

II コミュニケーションの道具としての詩

嚴粲が、詩人の意と小序の説との間に齟齬があると考ええるものは、その性格の違いによってさらに二つのケースに分けられる。本章ではその一つ目のケースを考えるために、淫詩的詩篇を材料として取り上げよう。

すでに諸家が言及しているように⁽¹⁸⁾、嚴粲は、朱熹の淫詩説——詩篇に作者自らの不道德な男女關係が詠われていると捉える解釋法——に否定的な態度をとつた⁽¹⁹⁾。彼のこのような態度が、小序首句を篤信する解釋姿勢の歸結するところであるのは見やすいことである。淫詩的詩篇とは、このような淫詩と類似しつつも性格が少々異なる詩群のことを指すために假に名付けたものである。淫詩的詩篇に詠われているのは、淫詩と同じく不道德な行爲ではあるが、男女の戀愛ではなく、主君に對する謀反を詠つたものをその典型とする。これらの詩篇では、詩の語り手が謀反を企てている人物を賛美している。したがって、これらを不道德な人間によって作られたものと考える學者もいる。淫詩的詩篇は、詠われた事柄が男女の戀愛のごとき卑俗な内容ではなく、主君への謀反という國家の大事に關わる罪惡であるので、詩人がどういう意圖でこれらの詩を作ったのかを解明することがより重要な問題となる。その解釋を見ることによって、作詩の意圖と小序との關係についての解釋者の考え方を見るのに役立つ⁽²⁰⁾。

二篇の詩を取り上げよう。鄭風「叔于田」と唐風「揚之水」である。この二篇は漢唐詩經學以來、それぞれ兄の莊公から鄭國を篡奪しようとして畫策する太叔段、晉の乗つ取りの企てを胸に祕め、甥の昭公によつて封ぜられた領地の曲沃で地歩固めに勤しむ桓叔、名は成師という二人の反逆者についての詩と考えられている。二篇の小序に次のように言う。

「叔于田」は、鄭の莊公を刺つた詩である。叔段は京に住まいし、田獵に出かけようすると、國人は喜んで彼に歸服する（叔于田、刺莊公也。叔處於京、以出于田、國人說而歸之）

「揚之水」は、晉の昭公を刺つた詩である。昭公は國を分割して（桓叔を）沃に封じた。沃は強勢になり、昭公は微弱になつた。國の民衆は昭公に叛いて沃に歸服しようとした（揚之水、刺晉昭公也。昭公分國以封沃、沃盛強、昭公微弱、國人將叛而歸沃焉）

この二篇の詩には二人への贊美が詠われる。朱熹は、これは二人に心服する民が彼らを美め稱えたものだとする。

太叔段は不義であつたが民衆を味方に付け、國人は彼を愛して、故にこの詩を作つた（段不義而得眾、國人愛之、故作此詩）
（「叔于田」集傳²¹）

〔本詩卒章で「我聞有命、不敢以告人」とあり〕その命令に聞き従いそれを人に教えたりしないというのは、

桓叔のために隠蔽しているのだ。桓叔は晉を我が物にしようとし、民衆は彼のために隠蔽しているのは、桓叔の謀略が成功してほしいと思つていたのである（聞其命而不敢以告人者、爲之隱也。桓叔將以傾晉、而民爲之隱、蓋欲其成也）

（「揚之水」集傳）

朱熹の解釋に據れば、その語り手はすなわち作者であり、したがつて二詩は篡奪を企てる謀反人を擁護する不道徳な人間によつて作られた詩篇ということになる。

嚴粲は、いわゆる淫詩と同じく、こうした詩においても語り手＝詩人とはとらなかった。『詩緝』鄭風「叔于田」首章に次のように言う。

段は田獵で駆け回るのを好んだ。彼の一味は、阿諛して言つた、「段が田獵に行く」と誰もがみんな付き従つて、ちまたには住んでいる者が誰もいなくなつてしまふ。住んでいる者が本當に誰もいなくなるわけではない。いるにはいるが、太叔段がまことに美しくて思いやり深いのはかなわないのだ」と。どうして段が本當に美しく思いやりが深いことがあろうか。これは段の一味の者の言葉である。ちやうど河朔の人々が安祿山や史思明を「聖」と呼んだのと同じことである。詩人の意圖は、このように段が善ならず、群れなす小人が互いに唆し合うようでは、必ずや惡事の絲口となり、自らに禍するに至るだらう。莊公はどうして彼らを禁じないのかということである。だから小序は、「莊公を刺る」と言う（段好田獵馳騁、其黨諛說之謂段之往田獵也、人皆從之。里巷之内、無復居人。豈盡無居人乎。雖有居人、但不如叔之信美且仁也。段豈真美且仁哉。其黨私之言、猶河朔之人謂安史爲聖也。詩人之意、謂段之不令而群小相與縱史如此、必爲厲階以自禍。莊公曷爲不禁止

之乎。故序曰刺莊公也

また、『詩緝』唐風「揚之水」二章に次のように言う。

もし桓叔を助けて彼の氣持ちを隠してあげようというのであれば、この詩を作らなければよかったのだ。また、すでに聲に出して詩として桓叔の企みを詠い、采詩者がこれを廣めてその君を諷するようにした。いったい桓叔の氣持ちを隠そうなどという意圖があつたであらうか。故に、「敢へて人に告げじ」と言っているのは、實はそれによつて昭公に告げようとしているのである。「我 命有るを聞く」と言っているのは、また、桓叔の企てがすでに完成して、禍がもうそこまで迫っていることを表現したのであり、昭公を激しく搖さぶつて目を覺まさせようという思いが至つて切實なのである（若助桓叔而匿其情則此詩不作可也。亦既聲之於詩、使采詩者颺之以諷其君矣、安在其爲匿之也。故言不敢告人者、乃所以告昭公。言我聞有命者、又以見其事已成、禍之甚迫、所以激發昭公者至切切也²³）

嚴粲は朱熹の説に反對し、この二篇の語り手は作者が假構した存在で、作者は篡奪の危機にありながらそれに氣づかない鄭君・晉君の目を覺まさせようと、太叔段・桓叔が民の歡心を買つて着々と地歩を固め野望を實現しようとしている危険な狀況を、よりリアリティックに伝えるために、あえて虚構の人物の口吻に託したのだと解釋する。

嚴粲の解釋は、「莊公を刺る」「晉の昭公を刺る」という小序の首句に従つたものであり、この點では漢唐の解釋

と大差はない。違いは、二詩が鄭の莊公・晉の昭公を刺つたものとなぜなり得るか、そのメカニズムを明確に説明した点にある。

この二篇の詩中には、詩序の言うような莊公・昭公を刺つた直接的な表現はない。このことについては、嚴粲も「叔于田」序について次のように言う。

「叔于田」「大叔于田」の二篇は、どちらも叔段の勇武な素質を美め、その他のことに言い及んだ言葉は一語とてないが、首序は、莊公を刺つた詩としている。これはおそらく『春秋』〔隱公元年〕が「鄭伯 段に克つ」と書して、「兄である莊公が弟の段に對する」教えを失つたことを刺つているのと同じなのである。首序は聖人の手を経ている（二叔于田、皆美叔段之材武、無一辭他及、而首序以爲刺莊公。蓋與春秋書鄭伯克段譏失教之意同。首序經聖人之手矣。）

嚴粲は、二詩が國君を刺る意圖を持つていながら、詩中に直接的な風刺の表現を用いていないことを、「春秋の筆法」に擬えて説明している。その場合、小序首序は、『春秋』における三傳のように、表現の裏に隠された作者の意圖を説明するものと位置づけられるであろう。嚴粲が首序は孔子の手を経てなつたものだと言うのに據れば、孔子は詩人の残した表現の眞意を汲み取り解説したということになり、彼自身がまとめた『春秋』の簡潔な表現の眞意を汲み取り解説した左丘明・公羊壽・穀梁俶の役割を、『詩經』に對して行つたということになるだろう。

しかし、『詩經』の詩篇の表現を、春秋の筆法に喩える嚴粲の説には難點がある。⁽²³⁾『春秋』においては、史官が歴史的事件を記述する際に、どのような用語や表現を選択するかに事件や人物に對する自分の評價を込めていると言

われる。三傳は、記事の表現を手がかりにして史官の意圖を汲み取った。つまり、史官は隱微な形ではあるが、措辭の中にすでに自身の意見を述べているのであり、三傳の著者はそれを發見し解讀する仕事を行ったのである。これに對して、二詩においては、嚴粲も言うように莊公への批判を讀み取る手がかりになるものは詩句上には何もない。先入見なく讀めばこれらの詩は、篡奪を企てる惡人に與する民衆の稱贊の表現にしかない。このことは、嚴粲も次のように認める。

詩を解釋するのに首序を用いなければ、二つの「叔于田」はいずれも太叔段を美めた詩となってしまう（説詩不用首序則二叔于田皆爲美叔段）

同様の發言は、他にも「揚之水」と同様、晉の桓叔を詠った唐風「椒聊」に見られる⁽²⁴⁾。

詩の内容と、作者の意圖とは食い違っている。詩を解釋するのに首序を用いなければ、本詩は桓叔を美めているとも言えることになる（言在此而意在彼也。説詩不用首序則以此詩爲美桓叔亦可矣）

したがって、詩序の詩篇に對する役割は、『春秋』の記事の筆法の特徴を分析することによって著者の毀譽褒貶の意を讀み取る春秋三傳とは異なる。首序は、その撰者が詩の熟讀玩味以外の何らかの手段によって知り得た、詩の表現には表れていない作者の意圖を提示したものである。三傳が『春秋』内部から抽出したものを提示するのに對し、小序はいわば詩の外部から情報を補完しているのである。

内容のみを見た場合、二詩を謀反人を稱賛したものと解釋することがむしろ自然であることを嚴粲が認めたのは、ある意味で朱熹の解釋の正當性を認めた發言である。しかしそれにもかかわらず、嚴粲は結局のところ朱熹の説を否定し、首序に従って解釋をしなければならぬと主張する。これは、二詩は詩自體で意味を自足し得ておらず、必ず首序と組み合わせなければ、正しい讀解には至り得ない、すなわち詩篇が作者の意圖を十全に讀者に伝える媒體として常に機能しているわけではないと、嚴粲が考えていたことを意味する。作者の意圖を萬人に理解させるという意味から言えば、普遍性の缺如であり、缺陷である。それを補うものが小序だということになる。⁽²⁶⁾ 嚴粲の尊序とは、詩の不完全性についての認識と不可分なのである。このような認識は、反復熟讀によつて詩自體から十全に意味を汲み取ることができると考える朱熹とは大きく異なっている。⁽²⁶⁾

なぜ、詩篇が作者の意圖を讀者に伝える上で不完全だということが起こり得るのだろうか。「椒聊」首章「彼の其の之子、碩大にして朋たぐひ無し（彼其之子、碩大無朋）」について、嚴粲は次のように言う。

桓叔は日々に強大さを増し、昭公はきわめて危うい状態になっている。昭公に告げているので、桓叔を「彼」と稱しているのである（桓叔日彊、昭公其危哉、爲告昭公、故稱桓叔爲彼也）

ここでは、嚴粲は「彼」という語の用法を根據に、本詩が昭公個人に警告をするために作られたと言う。詩篇は、作者が個別的な状況下において、特定の相手に對してメッセージを發するために作られたものと考えているのである。

同様の認識は、「叔于田」と同じく太叔段を詠った鄭風「將仲子」序に對する解釋に、より鮮明に現れている。

叔段は昔から鄭君の地位を奪い取ろうという企みを持っていた。莊公はもとよりそのことで含むところがないわけにはいかなかった。さらに段は勇武な才能を持ち、母親の寵愛を頼りにし、群れなす小人と結び、宗國に不利益をもたらそうとした。これが、莊公が深く忌み嫌ったものである……思うに、莊公はしばしば術策を廻らし物事が自然に成就するのを待つ計略をなした。心を用いること不仁である。段は浅はかで、群小に唆されて宗國を乗っ取ることを企んだが、それがどうして實現しようか。もとより段は恐るるに足らぬ相手なのである。段が莊公を襲撃しようとしている時になって、莊公は、「段を攻撃しても」よろしい」と言った。おそらく段を屠る口實を段自身が作ってくれたのをこれ幸いとし、かくては人々は自分のことを責めたりはできないはずだと踏んだのだろう。どうして涙を流して言ったなどということがあろうか。公はもとより冷酷な行爲をためらうような人間ではない。しかし『春秋』は、孔子の定めた、歴史的事件や人物を批評するための原理によって書かれているのに對して、變風の詩の言葉は國人が風刺し諫言するために書かれたもので、同列に論ずることはできない。本詩はただ莊公と祭仲とが段を殺そうと企んだので、莊公が祭仲の企みを拒んだ言葉虚構して、天をも感動させる公論によって莊公の目を覺まさせようとしたのである。このようにしてこそ、詩人の溫柔敦厚の旨を失わないものである（叔段舊有奪嫡之謀。莊公固以不能釋然于懷矣。而又挾材武、怙母寵、結群小、將不利於宗國。此莊公之所深忌也……蓋挾數用術爲秋實黃落之計。設心不仁矣。觀段之淺露、爲群小所縱輿而欲謀宗國、何能爲者邪。固易之矣。及段將襲鄭公曰、可矣。蓋幸其矍自彼作、謂人不得以讓我。豈有涕泣而道之之意哉。公固非不忍者。然春秋乃聖人褒貶之法、變風乃國人諷諫之辭、不可以竝論也。此詩止以公與祭仲有殺段之謀、故設爲公拒祭仲之辭、以天理感動之公論開悟之耳。如此則不失詩人溫柔敦厚之旨）

「春秋は乃ち聖人の褒貶の法にして、變風は乃ち國人の諷諫の辭なり、以つて竝論すべからず」は、次のことを指摘したものと思われる。すなわち、『春秋』の筆法は、後世の史官、あるいは孔子が過去の歴史的事件を振り返つて、自分たちの價值基準によつてそれを評價したものであるのに對して、變風の詩は、事件の渦中に巻き込まれた詩人が必死の思いで爲政者に對して諷諫を行うために作つたものである、したがつて冷靜な歴史的觀照のエッセンスとしての『春秋』とは異なり、詩には現狀打破のための詩人の策略、作爲が含まれている、ということである。「將仲子」の作者は莊公と祭仲が太叔段を殺そうと企てているのを諫めようと、祭仲の企みを莊公が拒否したと假定してその言葉を詠つたのだと嚴粲は言う。莊公に諫言してはいるが、その無道をあからさまに暴いて責めるのではなく、それとなく教え諭し、莊公があるべき自分と現實の自分との距離を目の當たりにし、罪に氣づくよう仕向けている、詩經大序に言う「諷諫（婉曲に諫める）」の表現と解釋するのである。また、首章を解釋して次のように言う。

國人は莊公と祭仲とが段を殺害しようという企てを持っていることを知り、その氣持を反對にとり、公が祭仲を拒む言葉を發したと假構して、それによつて公を諷した……莊公がこのような言葉を實際に發したことはない。詩人が公に代わつて言つたのだ……公を諷して、たとえ叔段を愛さなくとも、父母を恐れないというわけにはいかないだろうと言つたのである。つまり、「諷諫」したのである（國人知公與祭仲有殺段之謀。乃反其意、設爲公拒祭仲之辭以諷之……公未嘗有是言也。而詩人代公言之。……諷公縱不愛段獨不畏父母乎蓋諷諫也）

引用文の最後の部分は、詩中の、

豈敢愛之 豈に敢へて之を愛せんや

畏我父母 我が父母を畏る

仲可懷也 仲は懷ふべきなり

父母之言 父母の言

亦可畏也 亦た畏るべきなり

を説明した部分である。實際とは逆に、莊公が祭仲の太叔段殺害計畫を拒否しているとして、その拒否の言葉を述べたと考える。段を愛さないばかりか、母后が怒るだろうことを顧みもしない莊公に、それを悟らせるために、逆轉した自分の姿と言葉を故意に突きつけ、悔い改めさせようとしたと考えたのである。

嚴粲の解釋に據れば、本詩はきわめて切迫した重大な場面に、主君を改悛させるために巧妙に作り上げられた虚構ということになる。詩人がこのような虚構を用いたのは、主君を批判してしかもその怒りを招かないためである。つまり、戦略的なレトリックなのである。その意味で、本詩は作者から莊公へのコミュニケーションの道具である。

詩が特定の状況下で、特定の人物に向けてメッセージを伝えるために作られたとしたならば、日常會話におけると同様に、作者と相手とは「場」を共有しており、詩篇もそこに存在する言語外のコンテキスト、すなわち暗黙の了解に依存していることになる。詩句に一字として「刺」の要素がなくても、言葉の裏に批判し目を覺まさせようとする思いがあることは、當の相手には傳わり得る。嚴粲の詩經解釋が、詩篇の「言外の意」を重視したことは、

諸家が注目するところであるが、少なくとも一面では、「言外の意」はこのような作者と特定の相手との間の状況のコンテキストを意味している。簡単に言えば、詩篇は本來的には人間一般に向けての教化のために作られたものではないという意識である。

だとすれば、詩篇に込められた作者の意圖は、後世の讀者にとっては、理解困難な要素を含む。というよりも、むしろ完全な理解は不可能なものである。「將仲子」のように、主君に諫言するという特殊な状況で、「諷諫」の精神を具現するために、故意に第三者にはわからないようなレトリックを駆使して詩を作ることもあった。作者がこの詩に託した眞意は、詩人と莊公の二者の間にのみ共有されるべきものであり、本来外部には知られるべきではないものであろう。詩には、同時代性の制約、作者の韜晦という要素によって、作った者と、彼が詩を作って聞かせようとした相手の當人同士にしか通じない要素がある。

このように嚴粲は、詩はある特定の時と状況下において作られた個別性を有しており、その時代、社會状況のコンテキストに支えられて、初めてメッセージが十全に傳わるという意識を強く持っていた。國史は、本来ならば當事者以外は理解し得ないはずの情報は何らかの手段で知り得、それを首序として、詩篇の情報の缺落を補完している、だからこそ詩篇の意味を完全に知ることは、首序を抜きにしてはあり得ないと、嚴粲は考えた。『詩緝』陳風「東門之枌」に次のように言うのは、このことを指したものである。

首序の源流はきわめて古い。まさしく詩篇が作られたその當時のことであり、國史がその事柄を詩篇の前に記しておかなかったとしたら、孔子であってもそれを知るよしがなかったであろう（首序之源流甚遠。方作詩之時、非國史題其事於篇端、雖孔子無由知之）

Ⅲ 「あわれ閔む」のは誰か？

しかし、前章で検討したことのみで、首序の説が詩篇の内容と食い違っていることの理由をすべて説明できるわけではない。詩篇の内容と首序との關係について、嚴粲はもう一つのケースを想定している。鄭風「出其東門」を検討しよう。本詩の首章について、嚴粲は次のように言う。

鄭國が亂れ、男女は互いを棄て去るようになった。ある人が鄭國の東門を出て、雲のようにたくさんの棄てられた女性を見かけた。彼女たちは雲のようにたくさんいるけれども、誰も私が思いをかける相手ではない。私の心は、白絹の衣を着、もえぎ色の模様のスカーフを被った人のもとにある。彼女こそが私の妻だ。とりあえず彼女とあいしく暮らし、願わくはお互いに棄て去るようなことがなければそれで満足だ。どうして他人の夫婦のことを憐れむ餘裕などあるうか。これは、當時の世の混亂に感じ、自ら顧みて自分たち夫婦の間も無事に保つことができないのではないかと恐れているのである。「いばら縞衣綦巾あさぬの」スカート布の裙」と言うような「貧しい身なりを形容する」ものである（鄭國之亂、男女相棄。有出其東門見婦人之見棄者、其多如雲。雖如雲之多、皆非我思慮所存也。我心所存在於服白縞之衣綦文之中者、是我之室。且得相樂、幸不相棄足矣。何暇閔憐他人之室家乎。此感時之亂、自顧其室家亦恐不能相保也。縞衣綦巾稱其妻、猶云荆釵布裙也）

嚴粲の解釋に據れば、詩中の語り手は、自分たち夫婦の行く末を心配することにかまけて、他人のことなど「あわれ 関み憐む」ゆとりなどないと言っている。ところが、嚴粲が重んじたはずの本詩首序には「出其東門、亂を関む也（出其東門、関亂也）」とある。小序が本詩を「関む」詩だと規定しているにもかかわらず、嚴粲は「関む」暇などないと言った詩だと解釋するのである。両者は互いに齟齬しているにもかかわらず、彼は首序が誤っているとは言っていない。それでは嚴粲は、首序の「関む」とはいったい誰が関むことを言ったものと考えるのであるのか。

これと類似した例として、周南「兔置」が挙げられる。本詩の小序に、『兔置』は、后妃の化なり。關雎の化行はるれば、則ち德を好まざる莫し。賢人 眾多なり（兔置、后妃之化也。關雎之化行、則莫不好德、賢人眾多也）」とある。これについて嚴粲は次のように言う。

詩人は、ウサギ捕りの網を仕掛ける人が、卑しい職業に身を置きながら敬虔な態度を保持し得ているのを見て、彼が登用すべき人物であることを知った（詩人因見兔置之人處賤事而能敬、便知其材之可用）

これを見ると、序と作詩の意圖とは合致していると嚴粲は考えているように見えるが、以下に續く彼の説を見ると、そうではないことがわかる。

序を著した者は、詩人がウサギ捕りの網を仕掛ける人が賢者であることを賛美しているのによって、當時、德を好む賢者が多かったことを知り、さらにそれが關雎の徳化のたまものであることを知った。類推して物事

に廣く通じることのできるものでなければ、ともに詩を議論する相手とすることはできない。敬虔な態度を保持できるということは徳を好むことである（序者因詩人美免置之賢、便知當時多好徳之賢、又便知其爲關雎之化、非知類通達者、未可與言詩也。能敬則是好徳）

嚴粲の思考を辿ってみよう——詩人は、ウサギ捕りの男の人物に感心し、登用すべき人材だと稱賛している。そこで詠われているのは、あくまで偶然の邂逅であり個人的な感想である。これに對して、序者はこの詩から、當時ウサギ捕りの中にさえ賢者がいたのだから、當時賢者は多かつたのだらうと推察して、「賢人 衆多なり」と書いた——。詩人が詠おうとした特定の人物への稱賛ではなく、當時の徳盛んな様をこそ讀み取らなければならぬと考えたのである。このような理解に立つならば、序が述べているのは、作詩の意ではないということになる。嚴粲は、本詩において、序者は詩人の作詩の意圖を代辯しているのではなく、「免置」の詩から自らが讀み取ったことを小序に記したのだと考えている。

これは、『正義』や朱熹とは對照的な認識である。

本詩はウサギ罾を仕掛ける男が賢者だということを詠っているだけに、小序に「賢人衆多なり」と言っているのは、鄭箋に據れば「ウサギ捕りの男は卑賤な仕事をしているが、それでも、恭しい態度をとることができる。とすれば、賢人はたくさんいるのである。取るに足らないものを取り上げることによって、それ以外のより顯著なものを理解させるのである（經直陳免置之人賢而云多者、箋云、置免之人鄙賤之事。猶能恭敬。則是賢人衆多、是舉微以見著也）

（「免置」小序、正義）

文王の教化が世に行われて風俗は美しくなり、才能優れた賢者が多數現れ、ウサギ捕りの野人でさえも、このように登用するに足る才能を持っている。故に、詩人は彼の仕事の様子によって興を起こしてこれを美めた。文王の徳化の盛んなことはここからわかる（化行俗美、賢才眾多、雖置兔之野人、而其才之可用猶如此、故詩人因其所事以起興而美之、而文王徳化之盛因可見矣）

（「免置」首章、集傳）

『正義』や朱熹は、當時、賢者が多いことを伝えようとしたのは、序者ではなく詩人自身であり、詩人は卑しいウサギ捕りの仕事につく賢者を例示的に詠うことで、賢者が多いことを暗示したのだと考えている。彼らの解釋に據れば、詩人の意と首序との間には懸隔はない（むろん、朱熹は小序を遵奉して本詩を解釋したわけではなかったが、結果として出された解釋は小序の説を踏襲したものとなっている）。

このことと相關連して考えるべきものとして、邶風「緑衣」が擧げられる。本詩小序、「緑衣」の詩は、衛の莊姜が自分自身を傷み悲しんだ詩である。姜が身分をわきまえずに驕り高ぶり、婦人である莊姜はその位を追われ、そしてこの詩を作った（緑衣、衛莊姜傷己也。姜上僭、夫人失位、而作是詩也）について、嚴粲は次のように言う。

莊公が妾を溺愛し常理を亂したことが、實に衛の禍を生み出す原因となつたので、聖人は「緑衣」の詩を『詩經』に編入して後世に残して、夫婦が道徳を治める源を明らかにし、周南召南の道義を説き、世の戒めとした。女性の怨みの感情が詠われているところに、本詩の意義を見出したわけではない。本詩は「衛國を追われた」莊姜の自作であるのに、「衛の一部である」邶の風に編入されているのは、おそらく邶の人が傳えて詠っていて、それを采詩者が邶の地で採集したのであらう。『正義』はこの詩を邶の國の人間が作ったものだと

言うが、私は従わない（莊公溺愛亂常、實胎衛禍、聖人存綠衣以明夫婦治道之原、申二南之義以垂世戒、非取女子之怨也。此詩莊姜所作而屬邶風者、蓋邶人傳詠之而采詩者得之於邶耳。疏以爲邶國之人作之。今不從）

嚴粲は、『正義』が本詩を邶の人が作ったものだというのに反對して、本詩を莊姜の「自作」詩だと考える。本詩小序について『正義』は、

本詩小序に「而して是の詩を作る」と言い、別の詩序では「故に是の詩を作る」と言うのは、いずれも詩の作られた理由を敘述したものであり、必ずしもその人の自作だと言っているわけではない（此言而作是詩、及故作是詩、皆序作詩之由、不必即其人自作也）

と言い、「邶鄘衛譜」の「故に作者 各おの傷む所有り、其の國本に従ひて之を異にし、邶鄘衛の詩と爲す（故作者各有所傷、從其國本而異之、爲邶鄘衛之詩焉）」について、

「綠衣」「日月」「終風」「燕燕」「柏舟」「河廣」「泉水」「竹竿」の詩は、衛の夫人（莊姜）や衛の女性の事を述べているが、それを（邶・鄘・衛の）三つの國（地域）の風に分屬させることができたのは、「詩譜」の説に據れば、定めし三つの地域の人が作ったものであり、婦人や衛の女性の自作ではないからであろう（綠衣日月終風燕燕柏舟河廣泉水竹竿述夫人衛女之事、而得分屬三國者、如此譜說、定是三國之人所作、非夫人衛女自作矣）

と言う。疏家は、衛を追われた莊姜が作った詩が衛の一地域である邶の地で採集され保管されるはずはないという理由から、「緑衣」の詩は莊姜が作った詩ではないと考える。それに對して、嚴粲は、莊姜が作った詩が、邶の地に伝えられ邶の人に詠われ（邶人傳詠之）、それを衛の采詩官が採集した（采詩者得之於邶）と考えれば矛盾はないと反論した。本詩が邶風に編入されていることを重んじて、その理由を説明しようとする點では嚴粲も『正義』と同様であるが、作詩と傳來に『正義』とは異なる經路を想定することで、自述詩であることを主張しているのである。

しかし注意すべきは、本詩が『詩經』に收められたことと、作者莊姜の作詩の意圖は重要ではなかったと嚴粲が考える點である。彼は、孔子が本詩を『詩經』の一篇として採ったのは、この詩に詠われた「女子の怨み」ゆえではなく、「夫婦治道の原を明らかにし、二南の義を申べて以て世の戒めに垂らん」としたからであると考えてる。作者（と嚴粲が考える）莊姜の作詩の意圖——夫に棄てられた自分の身の上を悲しむという個人的感慨——と、孔子が『詩經』の一篇とすべき詩として見出した道德的價值（存詩の意）との間に齟齬がある、言い換えれば、孔子は詩の本來の趣旨とは異なる道德的意義を見出していると、嚴粲は考えるのである。

「出其東門」「兔置」と「緑衣」との嚴粲の解釋には、興味深い相違點と共通點とがある。「出其東門」においては、詩人が本詩に込めたのは個人的感慨であるのに、小序は當時の鄭國の全體的狀況に對する感情——「亂を閔む」——が詠われていると言う。「兔置」の詩は賢者を稱贊するという道德的な内容を持って作られたが、しかし嚴粲はそれはあくまでも作者の個人的な感想に止まり、本詩の詩教「賢人衆多なり」とは異なると考えた。つまり、小序は作者の意圖とは異なる道德的意義を見出していることになる。一方、「緑衣」の作者莊姜は個人的感慨を詠ったのに對して、小序も「衛の莊姜 己を傷む」と言っているので、作詩の意圖と小序との間には食い違いはない。

しかし、孔子は本詩に作詩の意圖とは異なる道德的價值を見出して『詩經』に採用したことになる。つまり、齟齬が「出其東門」「免置」では作詩の意と小序との間にあるのに對して、「綠衣」では作詩の意および小序と、孔子の存詩の意との間にあるのである。かついずれにしても嚴粲は、道德的意義を賦與したのは作者以外の者だと考えている。

以上からわかることは、嚴粲は、詩の意味と道德的意義は、詩人の作詩の意と、首序の説、詩經を編集した孔子の意圖（「録詩の意」「存詩の意」）との間で變容する、そしてそれぞれの關係は詩によつて多様である、しかも三篇いずれにおいても、詩篇が『詩經』の一篇として擔つてゐる道德的意義は、詩人の作詩の意に發しているのではないと考へてゐたということである。

このように見ると、嚴粲が小序を尊重したのは、單純にそれが詩人の意圖を正しく説明しているからというわけではない。詩が個別の狀況下で個人的な感想を吐露したものだとするれば、そこで詠われている内容はきわめて個別的であり、普遍性に乏しい。しかし、それが詩經に收められた時點で、詩は萬人の道德陶冶に奉仕する詩教のための存在となつた。そこでは、本來の個別的で特殊な内容の表現の中に、萬人に通ずる道德的意義を見出すという作業が行われなければならない。特定の個人に向かつて發せられた一回性の強いメッセージを、普遍的な道德的教訓とするためには詩の外部に昇華裝置が必要となる。「免置」首序が「賢人 衆多なり」と言い、文王の理想の御代を憧憬すべきと促しているのは、そのような昇華の結果の道德的メッセージなのである。

これから考えれば、本章の始めに提起した、「出其東門」首序が「亂を閔む」というのはいったい誰が閔むのか、という問いにも答へることができる。嚴粲の解釋に據れば、「出其東門」の語り手は、妻を思い、自分たちの將來に不安を抱くだけで、他人や世を憐れむゆとりなど持たなかつた。「出其東門」は、ごく個人的な感情を吐露する

ために作られた詩である。しかし、序者である國史は、あるいはこの詩を『詩經』に編入した孔子は、詩中の人々、亂世に生きる人々の不幸に對し憐れみの情を抱いたのであろう。そしてこの感情を喚起したということに、本詩の道德的意義を見出し、首序に記したのであろう。すなわち、本詩の效用とは、讀者に亂世を憐れむという感情を起こさせることにある。したがって、「出其東門」首序の「亂を閔む」とは、作者が本詩に込めたメッセージではなく、本詩の讀者が起こすべき、國史や孔子と同様の感情的反應の指針を提示したものということになる。

IV 詩篇の不完全性についてのまとめ

詩篇は本來、ごく限られた人間關係の中でのみ通じるコミュニケーションの道具であつた、あるいは、詩篇は本來、作者が出會つた個別的な事柄、作者の個人的な思いを詠つたものであつた、この二つの認識のいずれにしても、詩篇はそれ單獨では後世の讀者のための存在とはなることができない。詩篇の不完全性についての嚴察の認識は、このようなことを指していると考えることができる。小序とは、そのような缺陷を補い、詩篇に普遍的な道德性・教訓性を付與するものである。

したがって、嚴察が時に序者の意圖と聖人の意圖を同一視しているように見えることがあるのも不思議ではない。兩者とも、詩人の作詩の意圖とは別次元で、詩篇から道德的意義を見出し賦與する役割を果たすものだからである。また、彼が小序を注釋してたびたび「春秋の筆法」に擬するのに、「將仲子」中で詩の本文に對して、「春秋は乃ち聖人の褒貶の法にして、變風は乃ち國人の諷諫の辭なり、以つて竝論すべからず」と言い、兩者を區別しているのも、彼が小序の説くところは詩の本來の趣旨と別次元のものであると認識していたことの當然の歸結である。嚴察

にとって詩は事件の當事者として、切迫した狀況へ對應するために作られたものであるのに對して、小序は、個別的事柄から普遍的な道德を抽出する作業の成果であるという意味で、『春秋』の史官が果たした役割に酷似する。この事情は、作詩の意圖と首序の説とが矛盾しないと嚴粲が考える大多數の例においても變わりないであろう。個々の詩篇が持っていた個別的な狀況についての道德的メッセージが、國史によつて首序として明示され、孔子によつて潤色されることで、はじめて人類全體へのメッセージとして定着されたのである。だからこそ、嚴粲にとつて小序は尊ぶべきものである。

このような認識は、同じく尊序の立場に立ちながら、嚴粲の詩經學を漢唐の詩經學と明確に區別するものである。漢唐詩經學では、小序は詩人の作詩の意を説明したものだと考えられた⁽²⁹⁾。そこでは、詩の内容が詩教と直接結びついていると認識され、詩人の意と編詩者の意とが明確に區別されていない⁽³⁰⁾。故に詩人は道德的な思索者・行爲者、あるいは批評者である必要があった。

嚴粲は、詩人の作詩の意と、國史による首序の説、詩經を編集した孔子の意圖という三者を區別した。この三者は、歐陽脩が『詩本義』『本末論』で提唱した「詩人の意」「太師の職」⁽³¹⁾「聖人の志」に相當する（なお、後世の經師の手になる後序は、「本末論」の「經師の業」に當たる）。ただし、歐陽脩とは異なり、嚴粲は三者に本義（歐陽脩に據れば、詩人の意と聖人の志）、末義（歐陽脩に據れば太師の職）の優劣を付けず、國史と孔子とを詩篇を讀解し、そこに道德的意義を見出した者としてまとめ、作者と對比的に捉えている。これは、歐陽脩以來の詩の意味の多様性についての認識を發展させたものと考えることができる。

同じく尊序とは言つても、嚴粲の尊序が漢唐詩經學とは以上のように異なる認識の上に成り立っていることを看過すべきではない。

V 「作者」を重視した解釋の諸相

以上のように、嚴粲は詩人の意圖と序者・聖人の意圖とは食い違うことがあると考えていた。このような考え方は、詩篇の解釋に對してどのような役割を果たしたであろうか。この問題を考える前提として、詩人、すなわち詩篇の作者についての嚴粲の認識を概観する必要がある。第I章で述べたように、嚴粲が、詩篇の作者の存在を重視したことについては、先學によつてすでに考察が行われているが、ここではそれらの業績を踏まえながらも、本稿の問題意識に基づき、筆者なりの視點で整理してみたい。

右に見たように、『正義』は「出其東門」「綠衣」を、作者の自述ではなく人から傳聞した事柄を詩に詠ったものと捉えていたのに對して、嚴粲は作者が自分が實際に見た事柄と自らの思いとを詠った詩だと考えている。このような例は、他にも見出すことができる。邶風「谷風」二章について、嚴粲は以下のように言う。

前章では、もともとは自分の夫と年老いるまでともに暮らしたいと望んでいたことを詠った。この第二章では、自分が棄てられたことを述べる。「私はとほとほと道を行く」というのは、立ち去りたいという氣持があり、現實が自分の願いに反していることを思っているのである（上章言本望與其夫偕老、此章述其見棄、言我行道遲遲、有不忍去之意者、念事與心違也）

また、同詩四章では彼は端的に、「棄てられた妻がその昔、家を守ることに勤しんだ事を述べる（棄婦陳其往時

治家勤勞之事」と言っており、本詩を自述詩と認識していることがわかる。一方、『正義』は自述詩ではなく、作者が第三者から傳聞した内容を詠っているとし、次のように言う。

邶人⁽¹⁾で本詩を作った者が「女の」の言葉を知ることができたのは、おそらく「女に」従つて見送った者がこの事を語ったために、詩人は彼女の思いを述べ傳えることができたのであらう（邶人爲詩得言者、蓋從送者言其事、故詩人得述其意也）

朱熹も「出其東門」「綠衣」「谷風」いずれも、嚴粲と同じく自述詩と解釋した。⁽³²⁾ 嚴粲は同じ尊序の立場に立つ『正義』には與せず、かえつて小序を重んじない朱熹の説に與しているのである。詩人が人づての情報をを用いて詩を作ったという間接的な捉え方を排し、詩と詩人とを直接結びつけようという志向を持っていたという點で、朱熹と嚴粲の間に共通性が見られることになる。これは、詩には作者の眞實の思いがみなぎっているという認識を兩者とも持っていたことを表すであらう。

嚴粲は、「見る所に據りて詩を作る（據所見作詩）」と言つて、風景・事物など詩中に詠われている事柄を詩人が實際に見ていると考へて解釋することが多い。これも、詩篇に對する作者の存在を重視する彼の態度の表れといふことができる。このことについては以前考察したことがあるが、⁽³³⁾ ここでも一例を挙げよう。小雅「漸漸之石」卒章の「豕有⁽¹⁾り 白⁽²⁾き 皤⁽³⁾（有豕白皤）」の句について、嚴粲は次のように言う。

今武人は戰場へと向かい、白い蹄の猪が群れなして川を渡るのを見た（今武人行役、見豕白皤而群然涉水）

作者である武人が實際に見た光景を詩に詠っていると解釋している。これは、『正義』の毛傳の疏通に原型が見えるとは言え、鄭箋、およびその疏通⁽³⁵⁾、および朱熹の説とは異なっていて、嚴粲の獨自性を示す例といふことができる。

嚴粲も、詩の主人公と詩人とは異なる存在であると捉えて解釋することも多い。しかし、その場合でも彼の詩人の捉え方は特徴的である。

作者の重視は、詩の虚構性についての認識ともつながっている。衛風「考槃」は、衛の莊公に受け入れられず深谷に隠れ住む賢者の姿とその思いを描いた詩であるが、嚴粲はこの詩を解釋して、次のように言う。

しかしながら、「本詩各章に」「永く諼^{わす}れじと矢^{ちか}ふ」「永く過らじと矢ふ」「永く告げじと矢ふ」と言うのは、やはり賢者が高潔に振る舞い、僻遠の地に逃れ隠れ、そこで生涯を終えようと思っているのを、作者が形容しと言ったものである。賢者は自らこのように言ったわけではない（然永矢弗諼永矢弗過、永矢弗告、亦作者形容其高舉遠遯、有終焉之意耳。賢者不自言其如此也）

ここには、従來の解釋では必ずしも重視されてこなかった、詩の主人公である賢者と詩の語り手との関係について説明がなされている。嚴粲は、隱者の氣持ちを詠った詩中の言葉は、作者が「形容」したものであると言う。「形容」という語は、主人公の人間性を描き出すために、作者がイメージとして描き出したという意味と捉えられる。つまり、そこには一種の想像力の働きがある。詩に描かれた隱者の姿とその思いは、實際の隱者のそれをそのままトレースしたものではなく、あくまで作者が想像によって作り上げたものだと、嚴粲は考えている。⁽³⁶⁾ 詩の主人

公と作者との位相の違い、あるいは兩者の距離感に對する關心をそこに見ることができる。言い換えれば、たしかに本詩の主人公は深谷に隠れ住む賢者であるが、嚴粲の解釋作業では主人公の姿を描き出した作者の存在が強く意識されているということになる。

嚴粲の解釋における、「設言」——詩中で詠われている事實を超越した虚構、假構——に對する關心もこれと關連して考えることができよう。衛風「河廣」首章の、

誰謂河廣 誰か河を廣しと謂ふ

一葦杭之 一葦せば之を杭^{わた}らん

誰謂宋遠 誰か宋を遠しと謂ふ

跂予望之 跂^{つまた}てば 予 望^{のぞ}みなん

に對して、嚴粲は次のように言う。

〔宋の襄公の母で、實家の衛に戻された桓公〕夫人は、義として宋に行くことは許されなかったのだが、それを誰かが宋は遠いからと言って、自分が〔宋に行くのを〕邪魔しているとかりに捉えて、このように詠ったのである。言葉を作って自らを慰めたのである（夫人義不可往宋而設爲或人以遠沮己已。爲辭以解之）

従來の解釋では、「誰か宋を遠しと謂ふ」という句は單に「宋は遠くはなく目と鼻の先にある」ということを反

語的に言ったものと説明されていたが、嚴粲は、心から行きたくてたまらないのにそれが叶わない自分の心の悶えを表現するために、惡意のある人間が自分を邪魔して行かせないという筋を作者が假構したと捉えている。作者がその感情を單純に吐露したものとして詩を捉えず、感情をどのような表現に結晶させ、詩を言語的構築物として成立させているかという關心をもつて、嚴粲が解釋を行っていることがわかる。

詩中に詠われているのが作者が實際に見たことであるという認識と、作者が假構したことであるという認識、この二つの認識は方向こそ異なるが、いずれも作者の存在をきわめて重視しているという點で共通している。先に見た、詩を傳聞ではなく作者が自分が遭遇した事柄とそこで生じた思いとを自ら詠ったものと捉える解釋のあり方においても、作者の存在が強く意識されていた。作者の存在を重視すると言うことは、言い換えれば詩篇の表現に視點を据え、その表現にどのような作者の意圖が込められているかに解釋の重點を置くことである。

このような嚴粲の解釋態度は、毛詩大序の解釋に端的に表れている。毛詩大序の、

上は以つて下を風化し、下は以つて上を風刺す。文を主として譎諷し、之を言ふ者罪無く、之を聞く者以つて戒めとするに足る。故に風と曰ふ（上以風化下、下以風刺上。主文譎諷、言之者無罪、聞之者足以戒。故曰風）

について、嚴粲は次のように言う。

「文を主とす」とは、文辭を主とすることを言う。章をなして歌うことができ、人々はその言葉を玩味して

樂しむ。思うに、『詩經』は文を主として『春秋』は事を主とする。人にその詩句を玩味し樂しませた後に、それを手がかりにして、諷諫の意を込める。あるいは物に託し、あるいはいにしえの理想の御代を詠っているが、表現していることと言わんとすることが異なっている。⁽¹⁾ 本心をあらわにしない言葉によって諫めはするが、直接的にその過失を言わない。そのため、これを言うものは罪せられることなく、これを聞くものは、また自ら戒めるに足る（主文者謂主於文辭、成章可歌、使人玩其辭而樂之。蓋詩主文而春秋主事也。既使人玩其辭而樂之、因以寓其諷諫。或託物或陳古、言在此意寓於彼、詭辭以諫、而不斥言其失。言之者所以無罪、聞之者亦足自戒）

これを、鄭箋・『正義』と比べてみよう。

「文を主とす」とは、音樂の音階にあいかなっているということである。「諷諫」とは婉曲的に詠い、直諫しないことである（主文、主於樂之宮商相應也。諷諫詠歌依違、不直諫）（鄭箋）

詩人が詩を作るときには、心に基づき意を主とし、音階になつた文によって、音樂に乗せ、また間接的に諷諫して、主君の過失を直言しない……「諷」とは、だますという意味で、音樂に託し間接的に諫めるというのは、だますという意味であるのでこれを「諷諫」と言うのである（其作詩也、本心主意、使合於宮商相應之文、播之於樂、而依違諷諫、不直言君之過失……諷者、權詐之名、託之樂歌、依違而諫、亦權詐之義、故謂之諷諫）（正義）

鄭箋と『正義』の「謫諫」解釋は、いかに主君を批判してその怒りを回避するかという隱匿效果に視點が定められているのに對して、嚴粲の解釋では、詩をいかに魅力的なものにするか——それによつて批判されたものを喜ばせる、という現實的效果は考えられているもの——という、詩の藝術性についての關心が窺える。また「主文」の解釋において、漢唐の詩經學では音樂美の追求についての記述ととつてゐるのに對して、嚴粲は詩的表現の追求と捉えている。言語表現の仕方こそ詩の本質があるという認識が窺われる。これも、嚴粲の詩經解釋が、言語表現の裏に秘められた作者の意圖に對して深い關心を抱いていたことから導き出されたものである。

作者の存在を重視するという嚴粲の解釋態度は、朱熹のそれと相似し、正義と隔たりをもつ。「假設」「設言」という認識を本格的に解釋に利用したのも、やはり朱熹の時代であつた。嚴粲と朱熹との解釋手法の共通性を見ることができる。ここに我々は、小序に對する態度の違いを超えて、漢唐の詩經學と差別化される宋代詩經學としての共通の志向を見出すことができる。

したがつて嚴粲の首序尊重は、嚴粲の詩經學が例えば朱熹と比較してどれだけ退行しているか、すなわち彼の經學者としての守舊性の表れとして見るだけでは不充分である。彼がそのような立場をとつた學問的必然性と意義は、彼の詩篇解釋との關係から、すなわち首序を尊重したことが、作者を重視し詩篇の表現を重視した彼の解釋にどのように役立ったかという視點から考察していかなければならない。その際に、詩篇解釋において作者の意圖を重視した嚴粲が、小序は作者の意圖ではなく國史・孔子の意圖を表したものと考へてゐるという事實が、この問題を考へるためのヒントとなるであらう。

VI 嚴粲詩經學における首序尊重の意義

嚴粲の詩經學と朱熹のそれとの端的な違いが、尊序と反序という點に求められるのは間違いない。それでは、嚴粲は朱熹と同じく作者の存在を重視するという解釋態度を持っていたのに、なぜ小序に對して朱熹と正反對の態度をとったのであろうか。

『詩經』は儒學の經典であり、至高の道德的存在であつた。歴代の詩經學者は誰もがこのことを大前提にして、それぞれの解釋學を構築しなければならなかつた。その場合、詩の道德性の由來はどこに求められるか、について自分の立場を明確にしなければならぬ、かつそこで表明した自己の立場に詩篇の解釋は支配されることになる。このような條件下にあつたことを念頭に置くならば、朱熹が『詩集傳』によつて小序を否定した後にあつて、嚴粲が小序を尊重する立場をとつたことが、解釋學史的な視點から言つていかなる意義を持っていたかという疑問にも答えることができるのではないだろうか。

嚴粲の理解では、詩篇が人類の道德的陶冶に資する存在となつたのは、あくまで國史によつて序が附され、孔子の審定を経て『詩經』に編入された時である。その時に、本來個別的な事柄を詠い、個人的な感情を吐露するために作られた詩篇に普遍的意義が賦與された。ところで、筆者は前稿で、朱熹の注について次のように述べた。

詩の道德的機能の實現が讀者の反應に委ねられているということは、詩の内容の批評者が、正義における作者、歐陽脩における聖人⁽⁴³⁾ではなく讀者に移動していることになる。ただし、この場合の讀者の反應の可能性は、

共感か嫌悪かの二つしかない。また詩篇の内容も、完全に道徳的か完全に不道徳かの二種類しかない。さらに、それを明示しているのは朱熹の注であり、讀者は朱熹の解釋に従って道徳的な反應をすることが想定されているため、讀者の解釋の主體性が認められているとは言えない。つまり、眞の意味での批評者は朱熹である。⁽⁴⁴⁾

第三章で、「出其東門」首序の「亂を閲む」はこの詩を讀んだ者が抱くべき思いを提示したものということになると述べたが、首序が讀者が起こすべき道徳的な反應を提示しているとすれば、これは朱熹の注と同様の役割を持つていることになる。ここにも、朱熹と嚴粲との詩經解釋學上の影響關係が想定できるかもしれない。と同時に、ここから兩者の認識の違いも窺い知ることができる。

朱熹の詩經解釋は、基本的に讀者が詩篇に對して一様な感情的反應を起こすことを前提にしている。例えば、彼の淫詩説は、讀者が詩の内容と作者に對して必ず嫌惡感を抱くことを前提にしなければ成り立たないものである。言い換えれば、讀者が朱熹と同様の理想の讀者でなければ、朱熹の考える詩教は實現され得ない。これはフィクションナルな考え方である。したがって、朱熹の詩經學は、讀者に主體的な讀解と思索を求めながら、現實には彼の解釋に従って詩を讀解することを強制せざるを得ない。理念と現實との間に齟齬がある。

それに對して、首序を尊重する嚴粲の詩經學においては、詩の教育的作用は一に首序に従うところから生まれる。讀者は、詩に外付けされた首序の說を見ることによって作詩の狀況を讀解の要素に加え、また詩篇からどのような道徳的意義を讀み取るべきかの指針を得る。言い換えれば、詩篇の内容それ自體に對しては、讀者が一樣な反應を起こすことを前提としていない。⁽⁴⁵⁾ 尊序の立場をとることによって、朱熹が陥った難局を迴避している。

反序と尊序は、宋代詩經學を二分する解釋態度として、水と油のように完全に相容れないものとして考えられる

ことが多い——これは、『集傳』には小序の説に基づいて解釋を行つた例がはなはだ多く、實際上は朱熹は小序に強く依存していたということとは別の問題である——。少なくとも解釋理念としての反序と尊序は、相容れない對立項として認識されている。かつ、尊序に對してはその學問的保守性を強調されることが多い。しかし、反序と尊序とをそのように對立の相でのみ見るのは、また進歩的か停滯的かという相でのみ見るのは、問題を單純化したものではないだろうか。

上述したように、朱熹と嚴粲の詩經學の態度には共通項が多い。特に、朱熹も嚴粲と同様、作者の存在を強く意識し、詩を作詩の場に還元して解釋しようとするのは、宋代詩經學者が共有していた學問的志向の表れということができる。しかし、朱熹は、『詩經』の詩篇は道德的教化に資するものであるという儒教的詩經觀に則りつつ、小序を排して獨自の目で詩篇を解釋しようとした。詩篇と讀者との間を取り結ぶ仲介者を設定しない以上、讀者が讀み取るべき意味は詩篇に明示的に表現されていなくてはならない⁴⁶。このことにより、詩自體から道德性を（淫詩においては逆に徹底的な不道德性を）讀み取らなければならないという、解釋上の拘束を自らに課せざるを得なかった。詩の作者を重視しながら、彼の考える作者（あるいは詩篇の主人公）は道德的であるか、淫詩においては不道德であるかのいずれかで、道德に關わらない行爲をしたり感情を吐露したりする人物はいないことになる。

對して傳統的な尊序の立場に身を置いた嚴粲は、首序を尊ぶことによつて道德的意義の源泉を首序に還元することができ、詩の内容自體に必ずしも道德的意義を求めなくともすむようになる。詩中の主人公や詩の語り手の行爲や感情と、道德的意義とは同じではなく、詩の内容と詩教との間に一つの段階——突き詰めれば孔子の目——が存在すると考えることによって、詩を道德的に合致するよう解釋するという制約から解放され、詩の解釋の可能性を擴大することができ、詩篇解釋において作者の表現を追求することを可能にしたと言えるのではないだろうか。ま

たそれによって、詩を作詩の現場に復歸させ、そこでの個性、一回性を追求することが可能となり、結果的に朱熹以上に作者を重視した解釋を行うことができたのではないだろうか。

前章までに検討した、嚴粲が首序と詩の内容とが食い違っていると言う例を見直すと、そこで提出された解釋には、作者の存在を意識し、その表現意圖を明らかにするという志向が見られる。「將仲子」では、作者が主君を諫めるために戦略的な假設を用いていると解釋されていた。「出其東門」では、自分たちの平穩な生活を守ることに懸命で他人の不幸を関わりたくないという、亂世の過酷な状況に生きる人間の心理を、「綠衣」では夫に棄てられた妻のひたすらな悲しみをヴィヴィッドに読み取っていた。「兔置」では、作者が優れた人物を目の当たりにして抱いた感想が描かれていると説明されていた。このような讀解は、詩教としてメッセージ発信はもっぱら首序が擔っていて、かつそれは序者や孔子によって與えられたものであり、詩人の作詩の意圖はそれとは異なるところにあるという認識によって、はじめて可能になっている。つまり、これらの詩においては、道德的な意義の讀み取りは一に首序に従うという態度をとったことが、詩篇の解釋において作者やその表現意圖を重視することとつながっているのである。

さらに、小序を尊崇するとは言っても、嚴粲は蘇轍の小序觀を繼承し、尊崇の對象を孔子の審定を経ていると彼が考える首序のみとし、後序は後世の經師の敷衍の文章であると考えその對象とはしなかったが、その意義も同じ方向から捉えることができる。これについては、蘇轍の詩序觀と詩經解釋の關係について以前考察したことが、嚴粲にも當てはまる。すなわち、後序を尊崇の對象から外したことで、準據すべき詩序の規定は、きわめてシンプルなものとなり、解釋の餘地が大いにあるものとなった。詩篇の道德的意義の主體たる首序を、さらにどのよう⁽⁴⁷⁾に解釋するかは嚴粲自身の考えに任されるようにしたこと⁽⁴⁸⁾で、結果的に詩篇の解釋の自由度を広げることができた。彼

が首序のみを尊崇したことは、その經學的理由はさておき、解釋の自由度を廣げるための機能主義的な選擇と捉えることができる。

このように見ていくと、詩經は風敎のための存在であるという大前提を保持しなければならない儒敎としての詩經學においては、尊序はむしろ、詩篇の多様な解釋を可能にする働きがあつたと言えるのではないか。序に従うというのは、一見自らの目で詩經を解釋することを放棄しているように見える。しかし、嚴粲の尊序が漢唐のそれから變化していることを見逃してはならない。彼は首序の説は作者の意圖とは位相が異なるという認識を持っており、彼にとって首序の役割は、作詩の意圖を伝えるものから、讀詩の方向性を示すものへと變化している。このような認識に立った上で、首序に従うならば、道德的意義を序に託すという選擇肢を確保することができる。道德的意義は詩に外付けされていると考えることによって、詩篇を解釋する場合には道德性を顧慮することなく行うことができる。すなわち、詩篇を自由に解釋する可能性は、むしろ反序の立場に立つ朱熹より大きくなる。黃忠愼氏は、

残念なことに、すべての讀者が作品世界に浸り、玩味し、體得した詩の意味がいずれも同じか相似ていたものなることを擔保するために、嚴粲が提出した解決方法は、なんと讀者に「首序」の信賴性を自覺させ、それが述べている方向に讀者が作品を熟讀するということであつた。この提案は人々が頭を痛めた問題を單純化するものではあつたが、同時に『詩緝』の文學性を經學臭によつて覆い隠すという結果をもたらさざるを得なかつた（可惜的是、爲了確保每一個讀者所涵泳、玩味、體會的詩意都相同或相似、嚴粲提出的解決方案居然是提醒讀者「首序」的可靠性、要讀者朝此方向去涵泳、此一建議固然將擾人的問題簡單化、卻又使得《詩緝》的文學性不免爲經學氣味所掩了）

と言う^④。讀者それぞれの讀解行爲を想定した上で、詩教を實現するために、首序に従うというプログラムを嚴粲が考えたという指摘は卓見である。しかし、その影響については、朱熹の廢序が現實には困難に陥ったことを考えるならば、むしろ黃氏の結論とは逆の意義を見出すことができるように思われる。

宋代詩經學は、作者の表現意圖を重視した解釋を行うという共通の志向性を持っていて、小序のくびきから脱することはそれを實現するものと考えられた。しかし、彼らは同時に詩は道德的存在であるという前提にも立っていた。朱熹は小序を否定したために、この兩者の衝突によって解釋の隘路に嵌まり込んでしまった。嚴粲はこのような流れを承けて、再び小序を見直しそこに新たな性格を賦與することによって、詩經解釋の難所を切り抜けようとしたのではないだろうか。このように、反序と尊序とは互いに依存し補完し合う關係で捉えることができる。

嚴粲が朱熹以後にあって尊序の立場をとったのは、詩篇の眞の意義を追求するための合理的な選擇だったと言うことができるのではないだろうか。このように考えると、嚴粲の尊序は、むしろ朱熹の目指した詩經解釋の方法をより發展させるために機能しているということができる。もちろん、嚴粲がそのような解釋戰略に立って、自覺的に尊序という立場を選擇したとまでは言えないだろうが、しかし、結果的には彼の尊序の態度は、朱熹以後にあって、そのような解釋上の優位性を與えることになっている。そのような機能的な側面を無視することはできない。

南宋詩經學において、尊序が持續したのは、儒學上の信念の問題という以上に、解釋學史的な必然性を持っていたということができないだろうか。

本稿で扱った、詩の本文が作者の意圖を十全に表しておらず、序が情報を補完することで始めて十分な解釋に至るというケース、詩人の意圖と相異なる次元の道德的意義を序者・孔子が見出したケース、この二つは第Ⅰ章で述べたように、『詩緝』全體から見れば少數である。多くは詩人の意と首序の説が合致しているとり、詩人が道德

的意圖を持つて詩を作ったと解釋している。その意味では、本稿の分析は、嚴粲の詩經解釋のごく一部を切り取ったにすぎないと言われるかもしれない。しかし、少なくとも首序をそのようなものとして解釋する可能性を開き、嚴粲が總體的に自由な立場で解釋をする餘地を作ったという意味で、この問題は嚴粲の詩經學全體に關わる。本稿で分析した、詩人の意と首序の説との關係は、嚴粲の詩經學を考える上で無視できない問題である。

注

(1) 黃忠慎『嚴粲詩緝新探』(文史哲學集成、臺灣、文史哲出版社、二〇〇八)では、嚴粲の生年を一九七七年とするが、惜しむらくはその根據を示していない。故に本稿では、しばらく諸家に従い、生卒年不詳とする。

(2) 臺灣・廣文書局據味經堂刊本影印本、一九七〇再版本を用いた。

(3) 周東亮『《詩緝》の成書時間及其『以詩解《詩》』』(《西南交通大學學報(社會科學版)》、第十三卷第一期、二〇一二・二)。

(4) 代表的な評價として、『四庫全書總目提要』經部・詩類一の「詩緝三十六卷提要」の「宋代說詩之家、與呂祖謙書竝稱善本。其餘莫得而鼎立。良不誣矣」が常に挙げられる。

(5) 黃氏前掲書。

(6) 注(2)(4)以外に、筆者が目撃したものに次のようなものがある。

・周東亮・金生揚「論江湖詩人嚴粲生平及其學術」(《重慶科技學院學報(社會科學版)》、二〇〇八、第二期)。

・熊祥軍・任菊「論嚴粲《詩緝》的以《詩》言《詩》」(《昭通師範高等專科學校學報》第三二卷第六期、二〇一〇・十二)。

・熊祥軍・任菊「論嚴粲《詩緝》的文學思想」(《語文學刊》二〇一二、第六期)。

・宋均芬「《詩緝》概述研究」(《漢字文化》二〇一二、第三期、總第一〇七期)。

・宋均芬「《詩緝》（明味經堂刻本）音注存在的文字問題考校（上）」『漢字文化』、二〇〇八、第一期、總八一期）などがある。他に、戴維「詩經研究史」（湖南教育出版社、二〇〇一）、洪湛侯「詩經學史」（中華書局、二〇〇二）、郝桂敏「宋代《詩經》文獻研究」（中國社會科學出版社、二〇〇六）の該當部分も参考にした。

また、臺灣の修士論文に、

・李莉婭「嚴粲《詩緝》之研究」（國立中興大學中國文學系研究所碩士論文、一九九七）

・程克雅「朱熹、嚴粲二家比興釋《詩》體系比較及其意義」（國立中央大學中國文學研究所、一九九二）の二篇、大陸碩士論文に、

・李錦英「嚴粲《詩緝》研究」（二〇一一年、第三期）

の一篇があることを知ったが、いずれも全文は見ることができず、「摘要」のみしか見られなかった（臺灣の二篇は、臺灣博碩士論文知識加值系統、<http://ndltd.ncl.edu.tw/>、閲覧日：2012/12/28、大陸の一篇は、CNKI、中國優秀碩士學位論文全文數據庫、<http://gb.OverSearch.net/kcms/>、閲覧日：2012/12/25）。

(7) 黃氏前掲書、第四章「嚴粲《詩緝》的以文學說《詩》及其在經學史上的意義」に詳しく考察されているのを参照。

(8) 黃氏前掲書、第一章「嚴粲《詩緝》的解經態度與方法及其在經學史上的意義」（一）「《詩》教的特質」を参照。

(9) 黃忠愼氏は、「經過實際的統計、我們已經確定《詩緝》所引『朱氏曰』遠多於『呂氏曰』、『《詩記》曰』と言い、その注に、「《詩緝》引朱子之解共計五七七處、引呂氏之言則僅一七五處」と述べ（黃氏前掲書一二二頁、さらに詳細な「嚴粲《詩緝》引朱子與呂祖謙之次數統計表」によってそれを證明している（同、一七一頁）。

(10) 例えば、郝桂敏氏が「這說明嚴粲解詩既受到當時從文學角度解詩風氣的影響、又能堅守《小序》之說」（郝氏前掲書六五頁）と言うのを、この例とすることができると言える。

(11) 例えば、黃忠愼氏は、次のように言う。

不過、若以新派、舊派的二分法來區隔宋代的研《詩》學家、嚴粲屬於「舊中帶新」者、「舊中帶新」依然是舊、加他以對《詩序》首句全盤接受、詩旨的理解已先被說教型的舊說侷限住、則其以文學說《詩》的格局與氣象自然不

- 可能太大、則已是預料中事了。(黃氏前揭書二一八頁)
- (12) 『詩緝』陳風「東門之枌」に次のように言う。
首序之源流甚遠。方作詩之時、非國史題其事於篇端、雖孔子無由知之。或欲併首序盡去之、不可也。古說相傳猶不之信、千載之下、一一以胸臆決之、難矣……首序未易盡去也。
- (13) 『詩緝』陳風「東門之枌」に次のように言う。
後序附益講師之說。時有失詩之意者、一斷之以經可也。
- (14) 拙稿「穩やかさの内實——北宋詩經學史における蘇轍『詩集傳』の位置 三 小序および漢唐の詩經學に對する認識——」(慶應義塾大學日吉紀要『言語・文化・コミュニケーション』第三九號、二〇〇七)、「深讀みの手法——程頤の詩經解釋の志向性とその宋代詩經學史における位置——」(慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』第四號、二〇一一) 參照。
- (15) 黃氏前揭書二〇頁。
- (16) 同右。
- (17) 郝氏前揭書六五頁參照。
- (18) 郝氏前揭書六四頁など。
- (19) 淫詩説を否定した端的な發言として、例えば、『詩緝』、陳風「株林」序に次のように言う。
變風多男女之詩、或疑似後世艷曲、聖人宜刪之、非也。刺淫之詩、非淫者自作、乃詩人作詩譏刺其如此、所謂思無邪也。聖人存之以立教、使後世知爲不善於隱微之地、人得而知之。惡名播於無窮而不可湔洗、欲其戒謹恐懼也。讀詩者能無邪爾思則凜然見聖人立教之嚴矣。
ただし、例外と考えられる例もある。『詩緝』、鄭風「溱洧」卒章に次のように言う。
鄭衛皆淫聲、孔子獨先於鄭。今鄭之淫詩顧少於衛何也。詩之見在者孔子所存以爲世戒也。聖筆所刪多矣。言鄭聲淫者、舉其大體言之。不繫今詩之多寡、不必盡黜國史所體例目之爲男女之詩、以求合於鄭聲淫之說也

これに據れば、嚴粲は原理的には『詩經』中に淫詩が存在し得ることを認め、それが見られないとすれば、それは孔子が『詩經』を編纂するにあたって淫詩を排除したためだと考えている。鄭風「東門之墀」小序「刺亂也。男女有不待禮而相奔也」について、

丰、東門之墀、溱洧三詩、皆以鄭亂之故、男女不正、故皆曰刺亂也。出其東門言閔亂亦此義。

と言い、首章について、

東門有墀、其墀之外有阪、茹蕙之草生焉。此男子所居之處也。女欲奔之而未遂、故言其室則近、不難至也。人甚遠、未得就之也。

と言い、二章について、

女欲奔而而得、望男之就已也。

と言うのを見ると、嚴粲は本詩を自述詩と捉えているように思われる。だとすれば、彼は本詩を淫詩とみなしていることになる。

(20) なお、行論の便宜上、嚴粲の解釋に従い、詩が特定の事件・人物を詠ったものとして記述した。それが實際にその事件・人物を詠った詩なのか否かという考證は、本稿では行わない。

(21) ただし、朱熹は「叔于田」について、「或疑此亦民間男女相說之辭也」と、本詩が淫詩である可能性も示唆しているが、本稿ではこれを取り上げない。

(22) あわせて、前掲拙稿「それは本當にあったことか?—詩經解釋學史における歴史主義的解釋の諸相—」(慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』第二號、二〇〇九)第Ⅵ節において、嚴粲の本詩解釋を分析しているのを参照のこと。

(23) ただし筆者は、嚴粲が詩序を「春秋の筆法」に擬えて説明することが常に誤っていると主張するわけではない。例えば、鄭風「有女同車」首序の「『有女同車』は、忽を刺る也(有女同車、刺忽也)」に對して『詩緝』が次のように言うのは、言語表現の特徴から著者の意圖を推し量るという「春秋の筆法」を正しく捉えて、それに擬えたものということができる。

彼らが、最終的に國を追われたり、一端亡命してから改めて國守として歸國したことを理由にして、詩序はいずれも「鄭伯」と稱せず、本詩の首序では「忽」と言い、「擊鼓」では「州吁」と稱し、「墓門」では「陳佗」と稱したのである。これはいずれも春秋の書法を用いたものであり、これによって首序が孔子の手を經ていることがわかる（以其終失國、出入、皆不稱鄭伯、此首序稱忽、擊鼓稱州吁、墓門稱陳佗、皆用春秋書法、知經聖人之手矣）

- (24) 「椒聊」首序に、「椒聊」は、晉の昭公を刺つたものである（椒聊刺晉昭公也）と言うが、詠われている内容は、小序二句以下に、「君子は沃が強勢で、政治をよく治めているのを見、それが今後も勢力を擴大し盛大になり、その子孫が晉國を自分のものにしてしまふであろうことを知つた（君子見沃之盛彊、能脩其政、知其蕃衍盛大、子孫將有晉國焉）」と言うように、桓叔の治政を詠つていて、昭公に對する風刺の言は表れない。これについて嚴粲は首序の正しさを主張して、

この詩は、桓叔の強さを詠い昭公に言及していない。その意圖は、昭公の弱さを憂えることにあり、桓叔を主眼とはしていないのである（此詩言桓叔之彊而不及昭公。其意則憂昭公之弱而非主桓叔）

- (25) 作詩の意圖を十全に傳えるには、詩のみでは不完全で、それを補うものが小序があるということについては、錢志熙氏がすでに指摘している。「從歌謠的體制看風詩的藝術特點——兼論對《毛詩》序傳解詩系統的正確認識」（北京大學學報（哲學社會科學版）、vol.42, No.2, 1100五・三）参照。

- (26) 朱熹は、『詩經』は詩篇を繰り返し讀むことによりその眞意に達することができると考えている。つまり、詩篇はそれ自體で自足しており、外部的な情報に頼らなくても眞意を掴みうるという認識である。檀作文『朱熹詩經學研究』（學苑出版社、二〇〇三）参照。

- (27) 黃氏前掲書第一章第二節「美刺說與言外之意的關聯」、郝氏前掲書一五七頁參照。

- (28) 「知類通達（類を知りて通達す）」は、『禮記』『學記』の語。竹内照夫氏に據れば、「知類」とは、「類推して事理を理解し問題を解釋する能力」（新釋漢文大系『禮記 中』、一九七七、五四五頁）のこと。

- (29) それが端的にわかるのは、『正義』が小序を疏通する際に、例外はあるが基本的に、「作○○詩者……」という形式

を用いることである。詳しくは、拙稿「詩人のまなざし——詩人へのまなざし——『詩經』における詩中の語り手と作者との関係についての認識の變化——」（慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』、第五號、二〇一二）、第七章参照。

(30) 同右。

(31) 詩篇の管理者として、歐陽脩が『周禮』「春官・太師」の、「敎六詩、曰風、曰賦、曰比、曰興、曰雅、曰頌」に據つて音樂を掌る太師を取り上げているのに對し、嚴粲が毛詩大序に據つて、文書を掌る國史をそれに當てているのは、彼が詩の本質として音樂性より文學性を重視したことの表れと考えることもできよう。これについては後述する。

(32) 「出其東門」集傳に、次のように言う。

人が淫奔な女を見てこの詩を作った。これらの女は確かに美しく數も多いが、しかし私が思いを掛ける相手ではない。この女たちは、自分の妻が貧しくてむさ苦しいながら、まずまずともに心樂しく暮らせるのにおよばないと思つたのである（人見淫奔之女而作此詩。以爲此女雖美且眾、而非我思之所存。不如己之室家、雖貧且陋、而聊可自樂也）

「綠衣」集傳に、次のように言う。

莊公が妾に心を惑わされたため、正夫人である莊姜が賢女でありながら位を失つたので、この詩を作った（莊公惑於嬖妾、夫人莊姜賢而失位、故作此詩）

『正義』に見られたような説明はないことから、朱熹は「故に此の詩を作る」は文字通り、莊姜がこの詩を作つたと言つていると考えられる。「谷風」集傳に、次のように言う。

妻が夫に棄てられたので、故にこの詩を作つて、自分の悲しみと怨みの情を述べた（婦人爲夫所棄、故作此詩以敘其悲怨之情）

なお、「出其東門」についての朱熹の解釋については、前掲拙稿二〇一二、第VI章を参照のこと。

(33) 前掲拙稿二〇〇九。

(34) 本詩首章の、「武人 東征して、朝するに皇あらず（武人東征、不皇朝矣）」の『詩緝』に、「武人である私は東征し

て久しく外地にあり、天子に朝見することができない。苦勞の多い地に身を置いて、主君を忘れることがないのである（我武人東征久處于外、不得朝見君子、雖在勞苦之地、不忘君也）」と言ひ、嚴粲がこの詩を自述詩だと考えていることがわかる。

(35) 「此時征伐戎狄、役人勞苦、而有豕豬之白蹄、進而涉入水之波漣之處矣。是在地爲將雨之徵也」と言う。しかし、疏家は作者が「見た」と言うことを強調していないことは注意すべきである。

(36) 鄭箋の正義に、「荆舒之人似豕、其君猶白蹄者」と言うように、鄭玄はこの句を比喩ととっている。

(37) 集傳に、「豕涉波、月離畢、將雨之驗也」と言ひ、作者が實見したかどうかを問題にしていない。

(38) 小序に、「莊公を刺る也。先公の業を繼ぐ能はず、賢者をして退きて窮處せ使む（刺莊公也。不能繼先公之業、使賢者退而窮處）」と言ふ。

(39) ただし嚴粲も、詩人が詠っている賢者が作詩の當時實在していただろうことには疑いを挟まない。詩人は實在の友を今日の前に見ることができないから、その姿を想像しているのである。その意味で嚴粲は、詩で詠われることが實在の出來事や人物に基づいているという、詩經學の傳統的な思维的な形を踏襲している。これについては、前掲拙稿二〇〇九を参照のこと。

(40) 鄭箋に、「誰謂宋國遠與。我跂足則可以望見之。亦喻近也。今我之不往、直以義不往耳、非爲其遠」と言ひ、集傳は、「誰謂宋國遠乎。但一跂足而望、則可以見矣。明非宋遠而不可至也、乃義不可而不得往耳」

(41) 「言は此に在り、意は彼に寓す」という語は「椒聊」の注釋にも「言は此に在り、意は彼に在り」という形で現れている。言語表現には表れないところに、詩人の意圖があるという表現は、嚴粲の詩經解釋が志向するものを端的に表している。「言在此、意在彼」を説明するための解釋法は、漢唐詩經學からあり、それが例えば、「陳古刺今」であり「託物」である。これらの手法は嚴粲の詩經解釋では活用されているが（嚴粲が陳古刺今説を活用したことについては、前掲拙稿二〇〇九参照）、このうち、「陳古刺今」は、朱熹の詩經解釋において排されたものである（檀作文前掲書、第一章第二節「朱熹對《序》的具體批評」中の「濫用（陳古刺今）」、四六頁）。これも、朱熹が嚴粲と異なり、

詩が表現するところからのみ意味を汲み取ろうという志向を持っていたことの表れである。

- (42) 「いかにして詩を作り事と捉えるか?——『毛詩正義』に見られる假構認識と宋代におけるその発展——」(宋代詩文研究會會誌『橄欖』第十六號、二〇〇九) 參照。

- (43) 歐陽脩は嚴粲とは異なり、孔子は詩篇を『詩經』に編入するに當たつて、道德的意義が發揮されるように、既存の詩句に自ら手を加えたと考えた。このことは、彼が疏家や朱熹と同様、詩篇自體から普遍的な道德的メッセージを読み取ることができるはずだと考えていたことを表す。これについては、前掲拙稿「歐陽脩『詩本義』の搖籃としての『毛詩正義』」(宋代詩文研究會會誌『橄欖』第九號、二〇〇〇) 第VI章參照。

- (44) 前掲拙稿二〇一、五一頁。

- (45) 黃氏前掲書一三三頁。

- (46) 例えば、嚴粲が詩の言外の意を重視するのとは對照的に、朱熹の『詩集傳』の中で、「言外」という語は、齊風「猗嗟」の一例のみしか見出せない。

呂祖謙、號は東萊は次のように言った——本詩三章の主君を批判する氣持ちというのは、みな言外にある。再三嗟歎していると言うことは、それが莊公に大いに缺けていると言うことである。言わずとも理解できるのである(東萊呂氏曰、此詩三章譏刺之意、皆在言外。嗟歎再三、則莊公所大闕者。不言可見矣)

この一例にしても、呂祖謙の「言外」説を引用したもので、かつ、「言わずとも見るべし」と言うように、そこに詠われている作者の思ひは推測することがきわめて容易なものであった。したがって、本例も朱熹自身が詩の言外の意を重視したことを示したものとさえ言えない。むしろ、彼は詩を詩の語句自體のみで解釋しようとしていた。

- (47) 前掲拙稿二〇〇七參照。

- (48) 嚴粲が、後序を「說詩者の辭」と考え副次的な地位においたことは、決して後序の價值を全面的に否定したものである。彼は、後世の學者の誤った説と正しい説とが混在していると考え、後序を選擇的に用いている。事實、個別の解釋においては後序の説に基づいているものは非常に多い。

(49) 黄氏前掲書、一五七頁。

本稿は、日本學術振興會、平成二四年度科學研究費、基盤研究(B)「南宋江湖派の總合的研究」による研究の成果の一部である。